

近世の矢作橋

日本一長い橋

堀江登志実

● 目 次 ●

はじめに 3

一 矢作橋の始まり 5

土橋の架設／土橋から板橋へ 寛永十一年架橋／延宝二年の造替
一五六間の橋／請負人／掛替と修復

二 規模と構造 12

東海道随一の橋／規模／橋杭／矢作橋杭震込図／三州矢作橋掛直
下廻絵図／シーボルトと矢作橋

三 橋工事のプロセス―橋見分から完成まで 23

小普請方と作事方／橋見分／幕府役人の赴任／江戸から普請材／
大坂などからの回漕／三河山間部から普請材木／御手伝普請／阿
部氏の御手伝普請／岡崎藩の役割／斬初規式／幕領代官の出来栄
え見分／渡り初め／古材の払い下げ

四 橋の管理 44

洪水と矢作橋／芥除杭／矢作川の河床高／三州矢立筆記／矢作川
の出水と橋／橋を水勢より守る／箱番所／矢作橋と塩座

五 渡船と仮橋 56

渡船と仮橋／御馳走船／渡船請負／延享二年の渡船請負／渡船高札と賃錢／安政二年の渡船請負／城下町からの願書／岡崎藩の渡船支配／西大平藩歩兵の渡船／將軍家茂の渡船／明治天皇の東行

六 矢作橋の信仰・伝説・文芸 70

牛頭天王と矢作橋／矢作神社の絵馬／浮世絵と矢作橋／蜂須賀小六と日吉丸の出会い／矢作橋と文芸

七 近代・現代の矢作橋 81

近代から現代の橋へ

おわりに 83

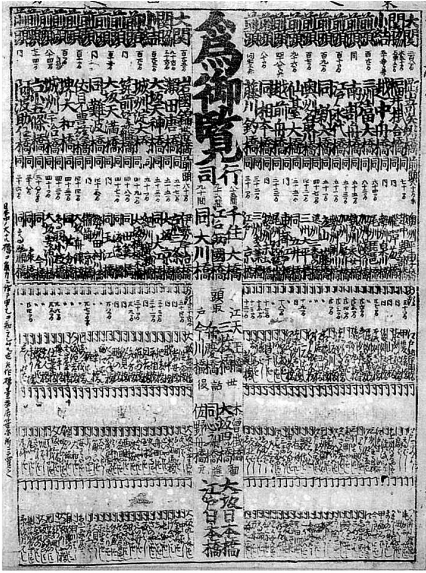
参考文献 84

はじめに

古代・中世の時代から矢作（岡崎市矢作町）の地は東西交通の要所であった。それは東海道が矢作川を渡る地点であったからである。近世になるとこの矢作の地に日本一長い橋が幕府によって架けられるようになる。

矢作橋は旅案内の「道中記」や紀行文、東海道の様子を描いた屏風や絵巻にも描かれ、東海道一の橋として旅人の注目するところとなる。近世後期には岡崎宿を象徴するものとして浮世絵にも描かれるようになる。

【写真1】日本大橋尽



矢作橋の長さ日本一を表すものに橋の番付表がある（写真1）。これによると、東の大関は矢作橋二〇八間、西は岩国錦帯橋一二五間である。二〇八間というのは、番付表のなかでは最長になる。この二〇八間は板橋としての最初の矢作橋の長さで、十七世紀後期の掛替で一五六間になる。この一五六間が以後矢作橋の標準の長さになるが、それでも日本一の長さであることに変わりはない。

矢作橋は幕府が直轄工事を行う公儀普請の橋である。東海道という幕府の全国支配に重要な基幹道路に架かる橋だからである。幕府役人が現地に赴いて工事を指揮する。近世に「矢作御橋」「御橋」と岡崎地域の人々に呼ばれるのもこの公儀普請の故である。

東海道には矢作川のように川幅の広い河川には大井川や天龍川があるが、これらの河川では渡渉や船渡しであるのに、なぜ矢作川には橋が架けられたのであろうか。湯浅常山ゆあさじょうざん著の『常山紀談』（卷之十八）に一つの逸話がある、矢作橋が洪水で壊れてしまったので家康が修造を命ずると、老臣らが費用の膨大なのと橋がないほうが城の防衛上都合がいいので、以後は船渡しのみにしてはどうかと進言したところ、家康は街道の旅行に不便であるからすぐに架橋するように命じたという。家康は「往來の旅人を苦しめんはわが志に非ず、又要害も其本を論ずれば、唯国民の和と不和とにあり、險を頼みて敵を防ぐは、道を知らざるなり」と云ったという。民の平和を基本とする家康の思想によるものである。近世を通じて架橋・修復工事が幕府によって維持されることには家康の意思が反映されているのかもしれない。

本書では、幕府によって進められる工事過程に焦点をあてながら近世の矢作橋の歴史を辿る。そこには広域の流通・物流とともに、幕府、藩、領民のほか、様々な地域と階層の人々が関与している。その歴史理解は一地域のみならず、広く近世社会の理解に通ずるものと考ええる。